

地域文化・歴史の再解釈：九州の事例を中心として

丸山， 雍成

<https://doi.org/10.15017/1936957>

出版情報：史淵. 130, pp.27-42, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



地域文化・歴史の再解釈

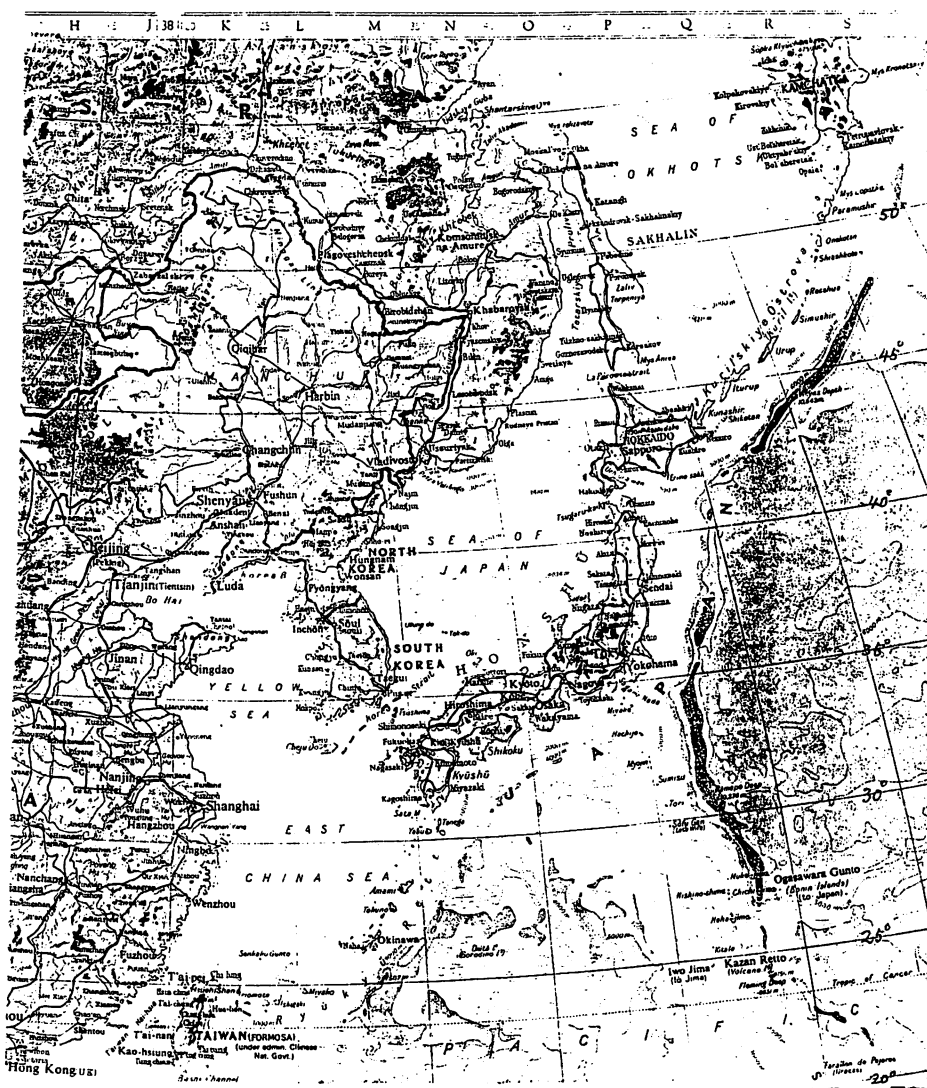
——九州の事例を中心として——

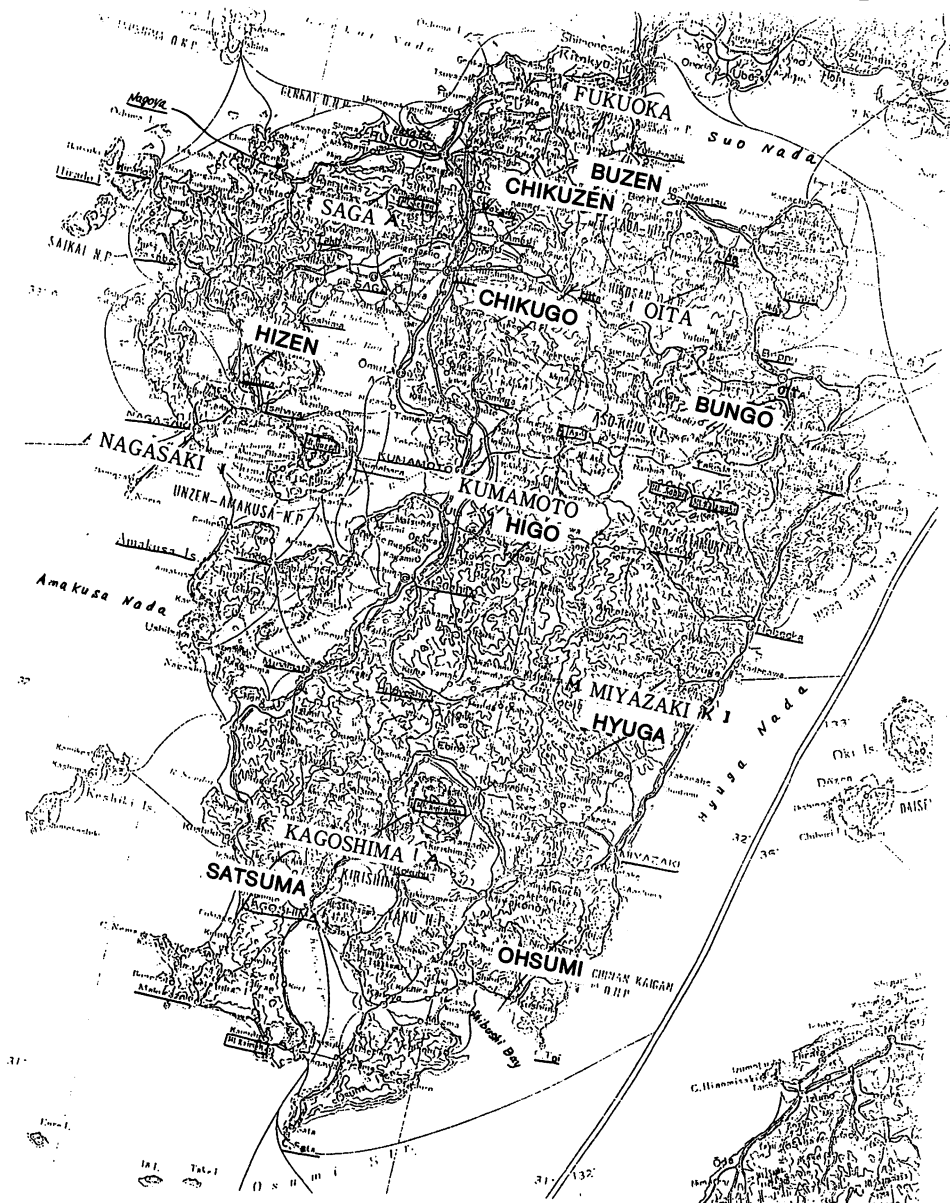
丸 山 雍 成

(一) 九州の地理的環境

アジア大陸の東海上に、カムチャッカ半島より発する千島列島、日本列島（北海道・本州・四国・九州）・琉球列島が、それぞれ弓形に連なり、台湾におよんでいる。地図1によつて明らかのように、日本列島の西南端に位置する九州は、西北に壱岐・対馬の二島をはさんで朝鮮半島に対峙し、南は種子島・屋久島を経て琉球列島に連なり、西南は東シナ海をはさんで中国大陆に臨む。このことから九州は、太古これらの列島弧・半島・大陸が連結し一体であった時、その東端部の重要な一角を占める位置にあつたものと推察される。

一方、九州は、古代国家の行政区画としての五畿七道（中央部の畿内五カ国と地方の七道）のうち、西海道にあたり、筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・薩摩・大隅の九カ国と壱岐・対馬の二島からなる。これら国名は近代初頭まで続き、九カ国という意味から“九州”と呼ばれたが、現在は福岡・大分・佐賀・長崎・熊本・宮崎・鹿児島





の七県の総称である。このように九州は一見、地域的完結性を示してはいるが、しかしその内部では複雑かつ変化に富んだ自然環境や地利的条件などにより、各地の人びとの生活態様や精神氣質に多様性をもたらした。

九州本島の地形・地勢の骨格をなすのは、次の四つの山地帯である。一は、中国山地の延長である筑紫山地帯。二は、瀬戸内海西方より国東半島・阿蘇を経て雲仙に達する中央火山帯。三は、四国山地の延長であり、九州の背骨状に中央よりやや斜めに横断する九州山地帯。四は、シラス（軽石が混じる灰白色の火山灰）台地に加え、霧島・桜島・開聞岳などの南部火山帯。そして、これらの山地帯の在り方は、その深い峡谷や盆地、河川流域の平野部、起伏に富むリアス海岸などを形成し、各地域における截然たる気候風土、社会・経済・文化的構造の隔差をうむ要因の一つともなった（地図2）。

気候を例にとると、九州全体としては夏多雨の太平洋型であろうが、細かにみると多様である。九州の北部は大陸季節風の影響で、冬は曇天が多く日本海型（特に山陰型）を示すのに対し、東部は冬に快晴がつづき降雨量の少ない瀬戸内海型である。有明海沿岸は内陸型に近く、北西海岸は南部に近い海洋型といえ、南部は高温多雨の南海型である。また、九州は、モンスーン地帯特有の豪雨を伴う台風の通り道で、特に南部は台風常襲地帯で、人家や農産物に多大の被害をあたえる。⁽¹⁾

こうした地勢・気候は、そこに住む人びとの氣質や言語（方言＝地方語）等の差異をもたらす。概していえば、日本海型は内攻的で精勤というものの、港湾都市博多（福岡市）のように開放的、お祭り騒ぎを好む性格もみられる。瀬戸内海型は穏和、南海型は剛健といつてよい。なお、九州の方言は南部（鹿児島県）と北西部（福岡・佐賀・長崎・熊本県）・東部（大分・宮崎県）に大別されるが、これは日本中世の有力な守護大名・戦国大名である島津・少弐・大友三氏の勢力圏と重なるところがあり、近世の幕藩体制下に一定度の変容を示しつつも完全に払拭されることはなかった。⁽²⁾

このように九州本島は、一つの地域的な完結性を示してはいるが、その立地条件から海洋に大きく門戸を開く一方、内部的には政治・社会的な割拠性を絶えず再生産し、日本列島のなかでもその歴史的展開を特異なものにしたのである。

(二) 中央―九州の政治支配と反抗の歴史

九州では、この地の先住民族の文化を中心に、中国・朝鮮半島を経由して流入する大陸系文化と、黒潮渦巻く「海上の道」を北上する南方系文化とが、濃淡の差こそあれ融合し、その特定部分がさらに本州中部へと東遷したものとされる。文化伝播には、作品・技術等のみならず、それを担う人間集団の移動を伴うことが多いので、前述の文化的融合は新たな日本民族・同文化の形成という問題とも関連する。

日本最古の史書『古事記』・『日本書紀』は、創世神話としての「天孫降臨」（天照大神がその孫ニギノ命を、天上の高天原より九州の日向高千穂峰へくだし派遣したという説話）、所謂第一代の神武天皇の日向より畿内大和への東遷伝説を記している。それは近世以来今なお盛んな日本国家の起源にかかわる邪馬臺（やまたい、やまい）国論争―中国三国時代の『魏志』倭人伝が描く三世紀中ごろの邪馬台国を九州北部の地方国家とみるか、畿内中心の統一国家とみるか、さらには邪馬台国の東遷説など―や、ツングース系の北方騎馬民族による大和征服説、等々とも関連するが、そこには日本国家形成期の民族移動と征服王朝の伝承が、かすかながらも投影されているとみてよからう。

こうした日本国家形成上の九州の位置づけは、その立地条件や地勢、移住民族などとも関連して、以後の九州の歴史展開に大きな影響をおよぼした。九州本島での大陸・外洋諸民族の分布は、九州北部が大陸・朝鮮半島系の渡来人、南部が東南アジアなど海洋民族に大別でき、これらを大きく掻きまぜた埫塙の中心が中部（熊本県）といえるかも知れない。こうした特定地域への諸民族の血の混入・融合の在り方は、その濃淡の度合や遺伝子による諸形質の表出、

さらには自然環境、社会的条件などに規定されて、ある時は権力への絶対的服従、また逆に強烈な反逆精神の発揮という形をとって現れた。

日本の古代国家形成への途上において、大和朝廷は、九州諸豪族の圧服には特に腐心せねばならなかった。例えば、景行天皇による九州鎮撫やその子日本武尊による熊襲（九州南部の豪族川上タケルを中心とする勢力）征伐、あるいは六世紀初めの筑紫国造磐井の乱とその鎮圧などは、その代表例である。このうち筑紫の磐井の場合、天皇の命令に従わず、朝鮮半島の新羅から賄賂をうけ、九州北・中部に勢力を張りながら、外は新羅・百濟・高句麗・任那諸国の毎年の貢物船を誘致し、内は任那に赴く朝廷の軍を妨害して戦った。福岡県八女市の岩戸山古墳が彼の墓だという。

律令制による中央集権的な古代国家が完成すると、政府は都と九州の政庁大宰府（「遠の朝廷」とも呼ぶ）とを結ぶ最大の幹線、山陽道をつくって連絡を密にしたが、それはこの地が大陸・半島との外交・軍事上に占める地域の重要性と、九州豪族の反乱に留意したからに他ならない。都城が奈良・京都へ移った後も、大宰府への貢納綿が奪われた時、大宰管内に居住する連中が新羅の海賊に呼応し、また大宰少弐（官職名）の藤原元利万侶が新羅王に通謀して、国家を害する計画をしたと糾明された事件などに、九州北部の有力豪族の特性がよく示されている。十世紀の中頃、平将門が関東で、藤原純友が瀬戸内海で反乱を起こした時、後者は追いつめられて大宰府を焼き払うなどしている。一方、古代国家の解体期、源平争乱では、平氏に擁立された安德天皇は、九州の対岸壇ノ浦で海中に身を投じ、敗走する平氏の将兵は九州などの山奥に逃れたが、ここは反体制側となった者の落ちゆく先でもあった。

日本中世は、まず、関東の鎌倉幕府と京都の朝廷との併立で推移したが、前者を討滅させた後醍醐天皇による公武統一と親政が、武家の代表足利尊氏の反抗によって崩壊する。この時、いったん京都を追われて九州へ敗走した尊氏は、九州北部の戦いで大勝して勢力を挽回し、再び都にのぼって政権を掌握し、新たに天皇を擁立する。これに対抗する後醍醐天皇の子懷良親王と、その子良成親王は、九州中部の菊池氏・阿蘇氏らに擁立され、征西將軍宮として九

州経済や、大陸・半島などの対外交渉に力を振るった。いわば九州は、中央で敗北した者に再起の機会を提供する場でもあったのである。

近世国家の形成期にみられる九州の大名・国人（在地領主）層の動向にも注目すべきものがある。豊臣秀吉は、全国統一の過程で九州南部（薩摩国）の戦国大名島津氏を征服して、全九州大名を支配下におき、「五畿内同前」（畿内五カ国に同じ）といわれる豊臣支配体制を樹立すべく、検地・刀狩などを推進した。しかし、九州各地の国人層は強硬に抵抗し、例えば中部（肥後国）では新領地に入った大名佐々成政を失脚させるほどの状況となったし、秀吉が北部（肥前国）の名護屋城を本拠として、朝鮮侵略の戦争を開始した時も、南部（薩摩国）の大名島津氏の家臣による梅北一揆が勃発し、また朝鮮半島内でも中部（肥後国）の大名加藤氏の家臣ら多数が朝鮮軍側へ加担するなど、統一政権への抵抗の姿勢が表出した。

一方、秀吉の死後、徳川家康の天下取りのためといえる一七世紀初頭の関ヶ原の戦では、豊臣恩顧の九州大名たちも、東軍（徳川方）と西軍（石田方）に分かれて戦った。特に、九州の南部・東部・中部などの大名は西軍に呼応するものが少なくなく、北部では東軍につくも、なお西軍に加担する大名もいた。本州の西南部に位置する大々名毛利氏は西軍側の主将格であったため、戦後処理の段階で所領を大幅に没収されたが、九州の大々名島津氏などはその処分をまぬがれた。これは、新たな統一政権者となった徳川家康でさえ、西南諸大名との力関係からして、すぐにはすべてに処分の大鉦を振るえなかったのである。江戸幕府が、九州に政治支配のくさびを本格的に打ち込むのは、実に家康の孫家光が征夷大將軍になってからである。このとき初めて、九州は幕府の直轄領（天領）・譜代藩領・外様藩領が大牙錯綜して配置され、幕藩制国家のミニ版ともいえる構造が出来あがった。

九州諸藩は、秀村選三氏によれば、(a)日本列島の西南縁辺部であるU字形地域（土佐・南伊予・九州南部・同西部・対馬・長州）の「西南辺境型領国」ともいえるべき外様藩、(b)それ以外の九州北部・西部・東部などの譜代藩、(c)その

中間的位置を占める中部・北部の外様藩、に類別される。このうち最も特徴的なものは(a)であり、(b)・(c)は江戸幕府の政治的作用を直接、間接に体現した諸藩といつてよい。(a)は、①藩権力の辺境的性格(旧族外様大名、本藩―支藩の關係)、②地方知行(給人の在宅や手作)の存続、③郷士制度と在郷家臣の存続、④小農民の自立不完全、⑤武士の開發等による地主制の展開、⑥領主的商品流通の展開(農民的商品流通の未熟、専売制と藩札、藩際交易)、⑦浦町の發展と特権的船持商人、⑧藩貿易の展開(琉球貿易・朝鮮貿易・密貿易、長崎貿易への進出、国産奨励と輸出、軍需品購入と軍制改革)、などを特質とする。これは「東北辺境型領国」との共通性も多いが、他方では、農民的商品流通が未熟で百姓一揆も頻発せず、藩際交易・対外貿易に關与して、それが近代的軍勢力・軍制を導入する基礎となった点が大きな違いでもある。⁽³⁾

十九世紀後半の日本近代國家の成立は、こうした「西南辺境型領国」の外様大藩(薩摩・長州・土佐・肥前)の連合勢力による江戸幕府打倒によつて推進されたが、それは関ヶ原の戦で長年苦汁をなめさせられたこれら諸藩の敗者復活、回天の大業として認識され、藩閥政治への方向を決定した。しかし、明治政府内の主導権をめぐる軋轢が、明治六年(一八七三)の征韓論争による有力参議らの下野を契機として、自由民権運動(それも九州では士族民権)として展開し、また他方では佐賀の乱・西南戦争などの士族反乱に帰結したことは、その後の資本主義發展に完全に対応しきれぬ「西南辺境型領国」諸藩の限界性を示唆するものであろう。

もともと、その後、明治政府主導の資本主義移植が九州北部を中心になされ、ここでは八幡製鉄所以下の重・化学工業部門が發展したが、一方、九州の他地域では封建時代以来の農業生産が主体となっていた。このように、九州では地域的分業關係の下、近代化と地主制が併存するという日本資本主義發展の特性を典型的に示してきた。第二次世界大戦後、日本国内でのエネルギー革命(石炭―石油移行)により、こうした近代的な重・化学工業部門は大打撃をうけ、代わつて中央からハイ・テク産業等が九州の農村部にも移入され、産業・都市構造、ひいては文化構造の変貌

をもたらしつつある。そして、中央に従属せぬ、九州地域独自の諸体系の形成・確立が模索されはじめている。

(三) 九州を中心にみた東アジア世界との関係

― 交流・侵略の拠点としての九州 ―

旧・新石器時代、特に縄文晩期以降の水稻耕作などの面で、九州が大陸・朝鮮半島と深い交流のあったことは、佐賀県唐津市の菜畑・宇木汲田遺跡などの発掘調査によって明らかである。水稻耕作の移入が弥生式文化とも関連しつつ日本の国家形成への端緒となったこと、九州北部がその最先進地域であったことは、近年発見された佐賀県吉野ヶ里の環濠遺跡によっても、よく知られるところである。いずれにしても、九州北部は国家形成に先だち、中国大陸や朝鮮半島と活発な政治交渉、文化交流をおこなってきた。

例えば、『漢書』地理志が、百余国に分かれた倭人が歳時をもって献見するという記事、同じ頃の『論衡』が、周の時代に倭人が鬯艸ちやうそう（酒を醸すために用いる香草）を貢納したとする記事、あるいは『後漢書』東夷伝が、建武中元二年（五七）に倭の奴国が光武帝に貢物を奉納して朝賀したとする記事、さらには『魏志』倭人伝が記す国名などの中には、九州北部やその近傍地域がふくまれていることは確かであろう。それを証明するものとして、福岡県志賀島出土の金印「漢委奴国王印」などもあげられるが、さらに福岡県の宗像神社三ノ宮が鎮座する沖ノ島の祭祀遺跡など、「海の正倉院」といわれるように、大和朝廷時代以降の遺宝が出土し、文化交流の姿を再現してくれるのである。

日本古代国家の形成期における、九州を中心とした朝鮮半島や中国大陸との交渉については、このほかにも四世紀末から五、六世紀にかけて、高句麗「広開土王碑銘」以下、中国の史書や『日本書紀』などによって知られるし、前述の筑紫国造磐井の反乱など、その一例である。

一方、九州と琉球など南西諸島との交流については、縄文晩期や弥生初期以降の土器が後者にも出土するところか

ら確認されるが、古代国家の成立期には種子・屋久両島や石垣・久米島以下からも朝貢船が派遣されており、さらに、沖縄方言がかつての日本古代の音韻に類似するところから、この地と本州・九州との密接な関係がうかがわれる。このように見ると、九州は、本州との関係を基本としながらも大陸・朝鮮半島や琉球列島を包含したところの、コンパスの回転軸ともいべき枢要の地域であったといえよう。

さて、遣隋使・遣唐使が九州の港津を發し、日宋貿易の寄港地として博多や今津港が繁栄するが、この地はまた中世、蒙古襲来をまともに受けた港津でもあった。その後、征西將軍宮の対外交渉については前述のとおりであるが、日明貿易に加えて私貿易、特に倭寇の活発化は、九州北西部の沿岸住民の関与によるところも大きい。さらに、近世国家成立期の豊臣秀吉による朝鮮侵略の主力部隊を構成したのは九州諸大名であるが、彼らは朝鮮陶工などを自領内に連行して、陶磁器業以下に従事させた。その後、日明関係の友好回復とともに、朝鮮通信使の派遣をみ、九州北部の一部大名も応接に関与したが、特に対馬・長崎・薩摩（琉球）の三口は蝦夷地の松前口とならぶ、鎖国制下の外へ開かれた窓口ともなった。

しかし、前述のように日本近代国家の成立過程で、政府部内において征韓論をとなえたのは多くが九州出身者であった。また、黒木彬文氏によれば、十九世紀後半の朝鮮甲申政変後、旧士族や衰退期の自由民権論者、国民諸階層が熱烈な対清開戦支持者と化し、特に福岡県の商工業者を講読者とする、かつての民権派『福岡日日新聞』の論説も「尚武論」を展開したことなど、⁴⁾ 通交・侵略の拠点としての九州の特性を象徴的に示す事例である。その後の日本資本主義の発展は、植民地の拡大とともに、九州中・西部の天草・島原など下層民衆の子女を、海外―中国・シベリア・東南アジア方面―への売春の出稼ぎ（「カラユキさん」）として放出したが、さらに行くところ、侵略戦争の過程において、服属地の各民族の子女を「従軍慰安婦」として酷使する途をひらいたのであった。

(四) 九州「地域」論の結びにかえて

「地域」とは何かという問題であるが、これは各時代の政治・経済・社会・文化の各レベルでそれぞれ異なり、研究者によっても、例えば東アジア・日本・九州ないし藩・県、さらには特定の都市や郡・村とするなど、一定の概念に到達していないのが現状である。本報告では、地域を一応「九州」に指定して、その歴史過程を概述したが、九州内部の特定地域を対象にすべきだとすれば、さらに方法を改めて精密化せねばならない。ここでは九州が、日本歴史の特定段階の典型的ミニ版をなし、また東アジア世界におけるコンパスの回転軸ともいうべき歴史・文化展開を示してきたことを指摘するにとどめる。

〔註〕

- (1) 高松光彦『九州の精神的風土』（一九八〇年）三五―四二頁。
 - (2) 川添昭二他編『九州の風土と歴史』（一九七七年）一〇頁。
 - (3) 秀村選三編『薩摩藩の基礎構造』（一九七〇年）序説、三一―二八頁。
 - (4) 黒木彬文「甲申政変と『福岡日々新聞』」（『異国と九州』一九九二年）。
- 「付記」 本稿は、一九九二年九月、仙台市で開催された国際比較地域研究会議における発表内容（日本文の分）とその要旨（英文）であるが、ここでは一部題名を改めて掲載した。

was a precursor to the Japanese Army's practice of drafting the "comfort women" (*ian-fu*) , from the occupied territories and exploiting them as prostitutes for the Japanese soldiers during the Japanese War of Aggression.

(IV)

There is no agreement on the definition of the term, "region." This paper treated the island of Kyushu as a "region" and described its history. I pointed out that Kyushu has shown typical miniature versions of the specific stages of Japanese history, and that Kyushu has played a pivotal role--like an axis of a revolving compasses--in the context of East Asia's historical and cultural development.

tries that are less dependent upon the central government.

(III)

The political and cultural exchange between northern Kyushu and Mainland China and the Korean Peninsula dates back to the pre-state period. The similarity of Okinawan dialect with the ancient Japanese language, for example, attests to the early contact between southern Kyushu and the Southwestern Islands including the Ryukyus. In the Medieval Period, Kyushu continued to function as a gateway to the outside world. The Japanese diplomatic missions to the Sui and Tang Courts departed from the ports in northern Kyushu. Hakata and Imazuko flourished as the ports of call for ships engaged in Japan-China trade during the Sung dynasty period. These two ports also bore the brunt of two Mongolian invasions in 1274 and 1281. The inhabitants of northwestern coast of Kyushu engaged not only in unofficial trade with Chinese merchants but also in pirating activities (*wako*) along the south China during the Ming dynasty period. Furthermore, Kyushu's *daimyo* constituted the major segment of Toyotomi Hideyoshi's expeditionary force to Korea. Later during the Tokugawa period, Tsushima, Nagasaki and Satsuma (Ryukyu) along with Matsumae in Ezo (Hokkaido) were the only gateways open to the outside world under the policy of national seclusion.

In the period of modern nation-state formation, many politicians of the Kyushu origins advocated the Conquest of Korea Policy. In the late 19th century, many merchants and manufacturers in Fukuoka supported the War with China after the Kapsin political coup in Korea. These incidents testify the character of Kyushu as a base for external trade and military expeditions. As Japanese capitalism developed and the foreign colonies expanded, young lower-class women from the central and western parts of Kyushu were sent overseas to work as prostitutes (*karayuki san*, literally "China-goers"). This

wa shogunate could not completely control Kyushu until the reign of Iemitsu, a grandson of Ieyasu. By the time of Iemitsu's rule, Kyushu was divided into elaborately intertwined fiefs--*tenryo*, i.e., the land directly held by the shogun, *fudai* domains, i.e., fiefs ruled by the hereditary vassals of the Tokugawa clan, and *tozama* (outside lords) domains, i.e., fiefs ruled by those *daimyo* who were retained by the shogun after the Battle of Sekigahara. The miniature version of the *bakuhan* system was thus placed in Kyushu. Hidemura Senzo conceptualized the characteristics of the domains of Kyushu during the Tokugawa period in his theory of the "southwestern frontier domains" which share a number of similarities with the "northeastern frontier domains." However, Kyushu differs from its northeastern counterpart in the following: rural commercialization was underdeveloped, peasant rebellions were scarce, and many domains engaged in trade with other domains in Kyushu as well as with foreign countries, which later helped Kyushu's *daimyo* in introducing new weaponry and modern military system.

The formation of the modern Japanese state was brought about by the coalition of those "southwestern frontier" type *tozama daimyo* (Satsuma, Choshu, Tosa and Hizen) that toppled the Tokugawa shogunate. However, the power struggle within the Meiji government caused a rift between different factions. Those who advocated The Conquest of Korea Policy were driven out of the central government in 1873. Some of them joined the Popular Rights Movement (which in Kyushu was actually the Former Warrior Class Movement). Others participated in the armed uprisings by the former warrior class in Saga and Satsuma. I will not discuss the nature of the later capitalist development in Kyushu under the state initiative. I would like to point out, however, that the post World War II energy revolution (from coal to oil) brought about major changes in industry, urban structure, and culture. These changes have led some people to promote policies for developing Kyushu's own regional organizations and indus-

authority--total subordination at some occasions and strong opposition at other times.

In the process of early state formation, the Yamato Court faced great difficulties in subjugating various clans in Kyushu. After the establishment of the state, the central government built a main highway, *Sanyodo*, and kept close contact between the national capital in Yamato and *Dazaifu*, the government headquarters in Kyushu. This was due to the strategic importance of Kyushu in terms of Japan's diplomatic and military relationship with the Chinese Continent and the Korean Peninsula and because of the state's concern over rebellions of the local clans. In the Medieval Period, Ashikaga Takauji, the leader of the warrior class, rebelled against the Emperor Go-Daigo who restored the imperial rule after having defeated the Kamakura shogunate. Takauji, forced out of Kyoto, fled to Kyushu, regrouped his forces and scored a great victory in northern Kyushu against the supporters of the Emperor, and later returned to the capital and established a new shogunate. Emperor Go-Daigo's son, Prince Kaneyoshi, in turn, retreated to Kyushu. With the title of *Seiseishogun* (West Pacifying General), the prince aided by his followers ruled parts of Kyushu and controlled the trade and other dealings with China and Korea. As these examples show, Kyushu offered political and military losers a sanctuary for regrouping themselves for a potential comeback.

In the formative stage of the pre-modern Japanese state, Toyotomi Hideyoshi subjugated all warlords, *daimyo* in Kyushu and carried out a new land survey (*kenchi*) and confiscated weapons from the peasants (*katanagari*). Hideyoshi, however, faced a strong opposition of Kyushu's *kokujin* stratum (local landowners and warriors). When Hideyoshi invaded Korea, vassals of such *daimyo* as Shimazu and Kato rebelled in Japan and in occupied Korea. At the Battle of Sekigahara in the early 17th century, most *daimyo* in Kyushu joined the Toyotomi side and were defeated by Tokugawa Ieyasu. However, the Tokuga-

A RE-INTERPRETATION OF REGIONAL CULTURE AND HISTORY : THE CASE OF KYUSHU

Yasunari MARUYAMA

(I)

The island of Kyushu, located in the southwestern part of the Japanese Archipelago, faces the Korean Peninsula across Iki and Tsushima islands in the northwest. To the south of Kyushu lie the islands of Tanegashima, Yakushima and the Ryukyu Islands. To the southwest across East China Sea is the Chinese Continent. Kyushu shows a certain degree of regional unity. Externally, its geographical location provided the island with paths across the ocean to the outside world. Internally, the island was always divided politically as well as socially. Kyushu thus has shown a peculiar historical development in Japan.

(II)

Many cultures converged on the island of Kyushu. Cultures of local indigenous peoples, continental cultures imported from China and the Korean Peninsula, and southern cultures brought across the Pacific Ocean were merged more or less into a single culture, and part of that culture was brought eastward to the center of Honshu Island as well. Inter-marriage between different racial and ethnic populations, natural environments and social conditions in one way or another conditioned local people's attitude toward the central